

臨床薬理学 第3版

日本臨床薬理学会 編

中野重行, 安原 一, 中野眞汎, 小林真一, 藤村昭夫 責任編集

＜書評者＞ 五味田 裕 (就実大学副学長・薬学部長/
岡山大学名誉教授)

薬は、元来生体作用の強い物質であり、その物質がヒトの身体の歪み、すなわち疾患を治療し、患者の心身の苦痛を癒したとき、初めてその物質に“薬”としての称号が与えられるものと思われる。そこでは薬の物質的特性の把握はもちろんであるが、作用する生体側の病態生理を十分把握しておく必要がある。しかしながら、疾患によってはまだ十分解明されていないものもあれば、また合理的な薬物治療を施す意味で考慮すべき点も多々存在する。その意味で、日本臨床薬理学会では、薬物治療の有効性と安全性を最大限に高め、個々の患者への最適・最良の治療を提供することを掲げている。

わが国では、基礎薬理学についての参考書は前々から存在していたものの、本格的な臨床薬理学についての教科書は1995年以前には存在していなかった。そこで、日本臨床薬理学会では臨床薬理をより体系化するために、1996年に『臨床薬理学』の教科書を発行するに至った。その大きな流れの根底

には、医療者が合理的な薬物治療を施す際に、常に薬がクスリたる真の意義を問うという“評価”の概念が存在していると思われる。薬理の「理」は、まさに薬たる“ことわり”を意味し、それは治療者側からの治療評価、患者側からの満足度評価がなくてはあり得ない。本教科書では、その双方の「評価し合いながら」という考え方がさらにクローズアップされ、最適・最良の薬物療法を指向する者に対して新しい視点での考え方を提供している。

具体的には、薬物治療における患者とのパートナーシップ、薬物治療の創薬・育薬のチーム医療の考え方、世界における医薬品開発の考え方、薬物代謝酵素と遺伝性、疾患別のよりの確な最新薬物投与計画、最新のエビデンスに基づく薬物治療などなど、個別化医療を踏まえた新しい情報を数多く盛り込んでいる。さらに、新規医薬品の開発に関しての評価では時代の流れと直近の法的側面に触れ、解説がなされている。

優れた医薬品は、医療施行側、

治療を受ける患者側、そして医療が施される社会側などにおいて、種々の観点から評価され、そこではじめて“真の薬”が誕生するとされる。その“真の薬”を誕生させるためには、創薬・育薬にかかわる医療人の専門性が問われることはいうまでもない。その意味で日本臨床薬理学会では、以前から日本臨床薬理学会認定制度を発足させ、すでに多くの専門医、認定薬剤師、認定CRCが誕生している。その結果として患者には早期の治療が、また副作用の早期発見が可能となり、また優れた医薬品の開発にも繋がっている。本書第3版では、最新の情報をもとに各専門家が実際の展開を踏まえながら解説されており、当学会認定制度の道標（みちしるべ）的内容が含まれている。

そのような意味で、本書第3版が、治療を施す者（医師、薬剤師、看護師ら）、創薬・育薬関係者（医薬品開発者ら）、また医学・薬学・看護学・臨床検査学などの分野での教育者、学生・院生、さらには医療福祉関係者らにとって大いに役立つものと確信している。

●B5 頁464 2011年
定価8,400円
(本体8,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01232-4]
医学書院刊